無　　題

渡　辺　美知夫

無　　題

渡　辺　美知夫

（1）

先頃一夕歓談のあと，編集の広瀬さんから課題が出た。詩について思うところを述べよ，というのである。私はこういう問題について，篤と考えを廻らすような生活からは，遠ざかって既に久しいので，一応は辞退した。しかし註文を出した側は簡単には引退がらない。私にしても詩の世界から遠ざかるについては，私なりの了簡がなくもない，という気があるので，結局は何となく引き受けた形になってしまった。

さて，何処から取付こうかと思案して，先ず心に浮かんだのが，むかしこの種の問題について重宝したWorld's Classics版のEnglish Critical Essays 3巻のことである。詩について語ろうというのに，いきなり参考書のことを思い出すなどとは，いかにも教師生活が半世紀にも及んだ者の因果だなと苦笑しながら，書架を物色にかかった。むかし旅順在勤中に持っていたのだから，ひょっとすると引揚げの際置き去りにしたかも知れぬと危惧しながら探すうちに，幸い漸く見つかった。私の嘗ての癖で購入の年月日が書き入れてある。1951年とあるから，引揚げてきたあと買い直したものとみえる。1951年といえば，敗戦後漸く海外から本がドッと入って来始めた頃ではあるまいか。そういえば近頃このWorld's Classics双書は，トント見掛けなくなったが，時代の移るのに合せて装いを改めたのでもあろうか。老書生にとっては名残り惜しい思いである。

ところで今度は河岸を替えて，辞書を披いてみることにした。こういう際に，これも私の癖になっているのは，先ず*SOD*を開けてみることである。私は英語は専攻ではないという口実を設けて，*Oxford English Dictionary* 10巻は手許に備えてはいないのだ。さて，その*SOD*つまり*Shorter Oxford Dictionary*のpoetryの項をひらいてみると，IIの項目のCに

The expression of beautiful or elevated thought, imagination, or feeling, in appropriate language, such language containing a rhythmical element and having usu. a metrical form 1581.

とある。最後の 1581 というのは多分，前記の World's Classics 版第 1 巻の English Critical Essays, XVI-XVIII Centuries の劈頭に載っている，Sir Philip Sidney の *An Apology for Poetry* が書かれたと推定される年であろう。しかし，これだけでは私のような「散文的」な男には，もうひとつ明確な image が浮かばない。そこで更にすぐ隣りの poesy の項に眼を移してみた。するとその用例の筆頭に

1. It is not ryming and versing, that maketh Poesie SIDNEY.

とある。そこで前記の 'Apology' をあけてみると，丁度真中ごろに正にこの句が見付かった。几帳面に定規で赤線を引いている。むかし確かに目を通した証據である。そしてこの句が私の中学時代の記憶を喚び起こすことになった。何年生のときであったか，国語の先生が些か脱線して，

この土手に登るべからず　警視庁

という句は，五七五のリズムを持ってはいるが，詩とは云えない。警視庁のお役人も，立札に詩を書いた覚えはないであろう。ところで

このところ小便無用　花の山

はどうか。前の立札とちがって，チョッピリ風流味がなくもないね，と仰言ったのである。韻を踏んだり，律を整えたりしただけでは詩にはならないという，Sidney のことばにこの話は具体的な裏付けを，曲りなりに勤めていることになる。

さて Sir Philip Sidney の essay に続いて，第 4 番目には Fransis Bacon の *The Nature of Poetry* というのが載っていて，その書き出しには

The parts of human learning have reference to the three parts of

man's understanding, which is the seat of learning: History to his memory, Poesy to his imagination, and Philosophy to his reason.

とあって，人間の能力に「歴史」，「詩」および「哲理」，つまり記憶と詩ごころと理性の3方面があると指摘している。これは実は *The Advancement of Learning* の，The Second Book の途中に出てくる文章である。

更に William Wordsworth は Poetry and Poetic Diction (Preface to the Second Edition of *Lyrical Ballads*, 1800) において

Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity.

という名文句を残しており，

and though this be true, Poems to which any value can be attached were never produced on any variety of subjects but by a man who, being possesed of more than usual organic sensibility, had also thought long and deeply.

と詩人には長期にわたる，深い思索が不可欠であることを云い，

The poet writes under one restriction only, namely, the necessity of giving immediate pleasure to a human Being possesed of that information which may be expected from him, not as a lawyer, a physician, a mariner, an astronomer, or a natural philosopher, but as a Man.

と，poetry が全人格的ないとなみであることを告げている。

また，Percy Bysshe Shelley の *A Defence of Poetry* は

According to one mode of regarding those two classes of mental action, which are called reason and imagination, the former may be considered as mind contemplating the relations borne by one thought

to another, however produced; and the latter, as mind acting upon those thoughs so as to colour them with its own light, and composing from them, as from elements, other thoughts, each containing within itself the principle of its own integrity.

と始まっていて，この paragraph の最後には

Reason respects the differences, and imagination the similitudes of things. Reason is to the imagination as the instrument to the agent, as the body to the spirit, as the shadow to the substance.

と，Reason が分別したものを imagination が綜合するのであることを示唆している。

この essay は実は Thomas Love Peacock の *The Four Ages of Poetry* に反論することが執筆の動機であったという episode も思い合わされる。Peacock のこの詩論は「詩歌の盛衰を鉄，黄金，銀，真鍮の四段階に分ち，文化の進展とともに詩は衰へるといふ詩歌無用の結論になる」(英米文学辞典) という解説で判る通り，凡そ今迄挙げて来た一連の引用文の趣旨とは正反対と見えるものなので，Peacock の友人でもあった Shelley は堪りかねて，'A Defence' を試みたのであった。因みに私の書架にある *Encyclopaedia Britanica* 1963 年版の T. L. Peacock の項には，彼が東印度会社の社員であったことや，彼の作った詩や小説のことは挙げられているが，この詩論のことは mention すらされず，全く無視されている。Peacock の詩論は 1820 年に発表されている。ということは Peacock は Wordsworth, Coleridge, Shelley, Keats, Byron などと連なる，Romantic poets の全盛期にこれを書いたことになるので，私にはこれは実業家でもあった Peacock が，時流に抗して，わざと詩人たちの「自己陶酔」を揶揄してみせたともとれるように思えるのである。

(2)

上記の数々の引用文において，詩について共通に用いられている key word は imagination ということばである。詩の本質は feeling — 情にあ

ることになるらしい。*Random House Dictionary* によれば，imagination とは

> 3. *Psychol*. the power of reproducing images stored in the memory under the suggestion of associated images (reproductive imagination) or of recombining former experiences in the creation of new images directed at a specific goal or aiding in the solution of problems (creative imagination).

とあって，ここでも個人の，情に基づく，過去の体験が基本となることが示唆されている。Bacon のいわゆる History である。

人類はその歴史の大半を，情を主軸として生きてきた。原初の時代以来，自然の脅威の中で生き抜くために，人類の頼り得るものは wishes and fears つまり情以外になかった。人類は情によって自然をなだめ，又わが意に従わせようとする外なかった。呪物崇拝 (fetishism) はその心情の反映である。shaman や祭司が重んじられ，頼られた。やがてそれが昇華されて宗教となった。政治的権力者と並んで，祭司階級が重きをなした。ヨーロッパの中世に，キリスト教，とりわけ Catholic church が一世を風靡したのは，その顕著な例である。主情主義の一つの peak であった。これに続く Renaissance 期には，古代ギリシアの natural philosophers が想い起こされて，情に対して知が台頭し始めた。主知時代の誕生である。主情主義と主知主義は，様々な葛藤を重ねながら，今日に到っている。このような process の中で，imagination の内容に知の要素が増大してゆくことになる。

当然同様の展開は個人の中でも起こっている。私はむかし「機能と実存」という題で，私の最終講義を主軸にした小冊を編んだことがあり，その終章を「真理と真実」と題して

巡　礼

真実，諦メ，タダヒトリ，
真実一路ノ旅ヲユク。
真実一路ノ旅ナレド，
真実，鈴フリ，思ヒ出ス。

と，北原白秋の真珠抄の一篇を引き，「この詩の中の，真実一路を真理一路と言い換えてみると，真理と真実のニュアンスの差が判るように思われる」と言い，「真理は主知的，真実は主情的ではないか」「またマコトは真言（事）であり，誠でもある。真実一路とは主知的な真理に主情的な真実が浸透して，両者を超克した，主意的な意味があるのではないか」と述べていて，Bertrand Russell の *Authority and the Individual* から

We know too much and feel too little.

という句を引用している。Feel too much の情の時代から，現代は Know too much の知の世になっている，というわけである。Russell が本来数学者であっただけに，私にはこのことばは殊更興味深い。

情に頼る生き方は，自然の猛威に対する怖れ (fears)，自己保全の欲望 (wishes) を離脱することができない。Aldous Huxley: *Ends and Means* の用語を借りれば Attachment 一辺倒である。Wishes and fears に囚われている自分に漸く気付いて，それから自己を解放しようとした人生の達人は，実は紀元前 5，6 世紀に，印度に釈迦，中国に老子，孔子など，さらに降ってはイエス，ムハンマドなどが現われてはいたが，彼等の体現し且説くところを真に理解し，真理を受けとめて真実とすることができるには，人類は未だ余りに幼なすぎた。そして wishes and fears の基盤は情である故に，これらの達人たちは宗教という形で受け取られた。Renaissance 以前は宗教が専ら人類を支えることになった。芸術もまた宗教を基盤とするものが栄えている。ところがやがて地動説を打ち出した Copernicus が現われて，知の時代到来の象徴となり，これに Galileo や Newton が続くということになって，先ず天文学の領域から始まる，人類の主知的傾向が顕著になり始めた。Attachment を超克して detachment へ，情の時代から知の時代へと人類の歴史は移った。宗教の時代から科学の時代への推移である。Newton は万有引力の発見者として，純粋科学の先達の一人であると共に，終生練金術への執念絶ち難いものがあったというが，練金術とはあらゆる金属を金に変えたいという，人間的な欲望 (wishes) を底に秘めているわけなので，彼の心中には，旧体制が依然断ち難く名残りを留めていたことになる。科学の発展はそれを指導原理とする technology を生んだ。産業革命はその成果である。そして今日では更に知の特性である detachment を越

える途として，non-attachment が歓奨されている。Attachment, detachment はよいとして，non-attachment という語は negative な印象を与えるところが気になったと見えて，Huxley は

Non-attachment is negative only in name.

と弁解している。私としては，情の時代，知の時代の次は意の時代であると言いたい。第2次大戦は最終段階で原子力を産んだ。それが武器として用いられた最初の例が日本ということになる。南太平洋の島々は今もってその被害に苦しめられ続けている。Science-Technology は Atomic Power を産んだ。今後それを兵器として使用すれば，人類の滅亡，否，地球そのものの破壊につながることは明白である。人類はここで，情理を蓋して，原子力問題と取組まなければならない。「できるけれどもやらない」という，意志の抑止力，これ以外に人類を，地球を救う途はない。この抑止力を生むものこそが釈迦の説いた慈悲であり，イエスの実践した愛である。慈悲を，愛を実現するためには，現在のわれわれ，一人一人の世界観・人間観を見直す必要がある。徹底的な意識改革である。民主主義はそれをわれわれ銘々に求めている。

Gorbachev のペレストロイカによる，旧ソ連の崩壊という大事件につけて私の思ったことは，Marx や Lenin が理想とした共産社会は，ロシア民衆の民度が，それを実現するには余りに低かったために，頓挫してしまったのではないかということである。Sir Thomas More の Utopia をはじめ，すべて人類の理想社会は共産制であるのに，制度上はそれを実現した筈のソビエトが，Stalin を生んでしまったのは，Communism と民衆の民度との差が余りに掛け距っていたためであった。ロシアの民衆はこれからその落差を埋める努力を，地道に，着々と，進めて行かなければならない。釈迦やキリストは宗教の世界に閉じこめられ，老子や孔子も現実にそぐわぬものとして敬遠され，ムハンマドの後裔も未だに各地に流血の惨事を起こし続けている。毛沢東も文化大革命という破綻を引き起こしてしまった。これらの現象はすべて，リーダーの理想と民衆の現況との距離が，余りに離れすぎていたためと，私には思われてならない。秦の始皇帝も余りに早く生まれ過ぎたと，私は思っている。

ところで imagination の座はもともと個人である。しかしわが国では，

明治時代になって欧米の文物に直接触れるようになるまでは，個人という意識は未発達であった。個人主義という語は今日でも，一般人の生活習慣では，悪い意味に用いられることの方が多いように思われる。日本の一般社会では 'I' は内実は未だに 'We' なのである。Homo sapiens が自己防衛のために，長期にわたって集団生活を送ってきた名残りが，日本の社会には依然色濃く残っていて，個人よりも集団が優先する。その集団も封建時代には，藩，いや実生活上は精々部落単位以上には出なかった。われわれの祖先は非常に限られた集団意識の中で暮らしていて，しかもそのことに気付かなかった。私の若い頃には芸術や芸事の世界でも，例えば歌舞伎と新派と新劇とは，それぞれが独特の「族」をなしてもいて，お互いの間に共通の場がなかったように思う。とりわけ私が驚かされたのは，数学という純粋科学までが，秘伝の巻物によって，特定の弟子だけに伝えられていた事実を知らされた時であった。Bacon の分類に従えば，わが国では memory と imagination は精錬されたが，reason は疎外されて，本来は公開性を特色とする科学までが，芸事としては扱われていたということになる。日本の社会では，芭蕉の本意に叛いて，弟子は師匠の「跡をもとめる」べきもので，師の「もとめたるところをもとめる」ことは邪道とされた。すでに鎌倉時代に親鸞は「わが弟子，ひとの弟子という相論のさふらふらんこと，もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。」と喝破しているのに，これは仏教界のこととして，宗教の枠内に閉じこめられ，一般社会では閥意識は今以て熾烈を極めている。従って歌舞伎，茶道，華道，さては料理に到るまで，技術的には精緻の極に達していながら，それを支える原理ということになると，話は途端に霧の中ということになり，一般人には手の届かない，閉鎖性が全面を蔽ってしまうことになっている。こういう雰囲気の中では，文学の世界でも，imagination が正面切って literary criticism の対象とはなり得なかった。

このことに関連して，私の忘れ難い思い出が幾つかある。一つはこれまた私の中学時代のことである。ある日私は電車通学の途中，プラットフォームで知り合いのおばさんに出遇った。すると，すぐうしろに私の父の友人の詩人が現れたので，私は一応の挨拶をした。おばさんは私に「あの人何する人や」と訊いた。私は「詩人や」と答えた。おばさんは「詩人て何や」と重ねて問うて来た。私は困った。突嗟に返事ができずにいると，おばさんが訊いた。「あの人月給なんぼや」，私は益々困った。もう一つは，ある

秋の一日お茶の宗匠と汽車に乗り合せたとき，彼女が黄金色をなびかせている稲田を見て，「綺麗」と感嘆の声をあげた。その途端私は反射的に，見事な稲田をここまで育てた，お百姓の激しい苦労を思いやってしまった。次は戦後のことになる。私が山梨から東京に移って間もなくの頃である。私より１年早くＲ工大を卒業して，当時は東京の工大の教授として威勢のよかった人と，車で甲府に行くことになり，途中籠坂峠の茶屋で一休みした。茶屋のおばさんの話で，太宰治の詞碑が建っているというので，街道を離れて小途を少し入って行くと，成程柱状の碑が建っていた。「富士には月見草がよく似合う」と彫られている。工大教授は私に向って「太宰はもうこのとき少し頭がおかしかったんだな」と呟いた。私は別に太宰のこの句が天下の名文句とも思ってはいないが，さりとてこんなことを言う奴は，少々気がふれているとも思わない。Technology の世界と詩の世界には，どうやら断絶があるらしい。これは何とか埋め合わせが必要だ。私はしみじみそう思った。

（3）

私も若い頃には，文学青年のはしくれとして，短歌も詠んだ，俳句も作った，詩も書いた。しかし私の心の中には，風雅の世界に沈潜することは逃避だ，という声があつた。その上情の世界に片寄る日本の社会には，重要なものが欠けていると思わずにいられなかった。日本の社会に欠けていると，私に思われた 'Philosophy' の世界が気になった。英文科に籍を置く身には，これは苦しく辛いことであった。私は中国，ギリシャ，ヨーロッパ近世の哲学の講義を聴いてまわることになった。そうこうするうちに出会ったのが Walter Pater である。これ又私には手に余った。1 年留年もした。そして今この漫録の最後に思い出すのが

All art constantly aspires towards the condition of music.

という，Pater の *The Renaissance* 中の The School of Giorgione という章に出てくることばである。この句に初めて出会ったとき，私は condition of music とは純粋形式のことであろうと思った。しかし，他の芸術は知らず，文学はコトバを扱うという宿命を負うている。コトバには必ず意味が

つきまとう。意味は純粋形式にはなり得ない。従って文学は純粋形式にはなれない。だから Pater は aspires と言っているのだ。私はそう思った。しかしこの句には何となく惹かれるものがある。何故か。

その答えとして私は

人生は不断に純粋形式にあこがれる。

と art の代りに life を置いてみた。そうなると，life そのものが art になることが，自分の aspiration ではないか，という気がしてきた。

歌を詠まなくても，詩を作らなくても，life そのものが詩になること，これが私の結論である。

To treat life in the spirit of art, is to make life a thing in which means and ends are identified.

—Walter Pater: *Appreciations.*

— (1994：11：30)